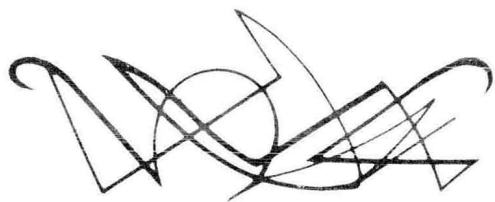


日本現代文學
全集

34

岡本綺堂
小山内薫
眞山青果集



日本現代文學全集・講談社版 33

外江劍
天尙小
杉下司
小木上
集

編	集	整
伊	藤	郎
龜	井 勝	
中	村 光	夫
平	野	謙
山	本 健	吉

日本現代文學全集

34

岡本綺堂・小山内薫・眞山青果集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和43年6月10日印刷

昭和43年6月19日發行

定 價 600 圓

© KÔDANSHA 1968

著 者 岡 本 綺 堂
お か も と き どう
お さ ない かおる
小 山 内 薫
ま や ま せい か
眞 山 青 果
發 行 者 野 間 省 一
印 刷 者 北 島 織 衛
發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽 2-12-21
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 寫 版 製 製 背 表紙クロソ 口 繪 用 紙 本 文 用 紙 函 貼 用 紙 見 返 し 用 紙 扉 用 紙	刷 製 刷 本 函 革 草 紙 用 紙 紙 用 紙 紙 用 紙 紙 用 紙 紙 用 紙	大 日 本 印 刷 株 式 會 社 株 式 會 社 興 陽 社 株 式 會 社 大 進 堂 株 式 會 社 岡 山 紙 器 所 株 式 會 社 石 井 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社 本 州 製 紙 株 式 會 社 安 倍 川 工 業 株 式 會 社 三 菱 製 紙 株 式 會 社 神 崎 製 紙 株 式 會 社
---	---	---

落丁本・亂丁本はお取り替えます。

岡本綺堂集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

修禪寺物語	七
鳥邊山心中	一七
時雨ふる夜	二六
權三と助十	三三
相馬の金さん	四〇
近松半二の死	四六
天保演劇史	四八

作品解説……………稻垣達郎三

岡本綺堂入門……………山本二郎四六

年譜……………三三

参考文献……………四五

小山内薫集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

病友……………一三

『色の褪めた女』……………一六

手……………一三〇

十三年……………一三

沈黙……………一四一

堀田の話……………一四五

不思議……………一四九

梅龍の話……………一五

手紙風呂……………一六

第一の世界……………一六

息子……………一七五

西山物語……………一八三

亭主……………一九五

盛遠（第一部・第二部）……………二〇三

森有禮……………二二

作品解説	稻垣達郎	四三
小山内薫入門	山本二郎	四六
年譜		四七
参考文献		四四五

眞山青果集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

作品解説……………稻垣達郎 四三

眞山青果入門……………山本二郎 四〇

年 譜…………… 四二

参考文献…………… 四四

南小泉村……………三七

平將門……………三七

大鹽平八郎……………三七

桃中軒雲右衛門……………三七

岡本綺堂集

春風の

舞臺智恵の

女がた

舞臺

修禪寺物語

(伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず。由來もしれず。木彫の假面にて、年を経たるまゝ面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懷してこの稿成る。)

登場人物

面教師 夜叉王
夜叉王の娘 かつら
同 かへで
かへでの婿 春彦
源左金吾頼家
下田五郎景安
金窪兵衛尉 行親
修禪寺の僧
行親の家來など

(一)

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村(今の修善寺) 桂川のはとり、夜叉王の住家。

蔓草の古びたる二重家體、破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に

紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔て、塔の峯つゞきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。(二重の上手につゞける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる藩簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂廿歳、妹娘楓、十八歳。相對して紙砧を搗つてゐる。)

かつら (聴て砧の手をやめる) 一晌餘りも搗ちつゞけたので、肩も腕も痺るゝやうな。もうよいほどにして止めうでないか。

かへで とは云ふものゝ、きのふまでは盆休みであつたほどに、けふからは精出して働かうではござんせぬか。

かつら 働きたくばお前ひとりで働くがよい。父様にも春彦どのにも褒められようぞ。わたしは忌ぢや、忌になつた。(投げ出すやうに砧を捨つ)

かへで 貧の手業に姉妹が、年ごろ搗ちなれた紙砧を、兎かくに飽きた、忌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか。

かつら (あざ笑ふ) いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人氣質として、この伊豆の山家に隠れ栖、親につれて子供までも鄙にそだち、詮事無しに今の身の上ぢや。さりとてこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近いためしは今わたし等が搗つてゐる修禪寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子ともその通りぢや。たとひ賤しう育つても、色好紙の色よくば、關白大臣將軍家のおそばへも、召出されぬとは限るまいに、賤の女がなりはひの紙砧、いつまで搗ちおぼえたとして何とならうぞ。忌になつたと云うたが無理か。

かへで それはおまへが口癖に云ふことぢやが、人には人それゝの分があるもの。將軍家のお側近う召さるゝなどと、夢のやうな事をたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら お前とわたしとは心は違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彦といふ男を持った。それに引きかへて姉のわたしは、二十歳といふ今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたらし生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、満足して暮すおまへ等に、わたしの心はわかるまい喃。(空囁く)

(楓の婿春彦、廿餘歳、奥より出づ。)

春彦 桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面作師といへば、世に恥しからぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、勿體なくも聖徳太子、つゞいて藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緒正しき職人とは知られぬか。

かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはなされまいが……。

春彦 生業にしては卑しいか。さりとて異なることを聞くものぢやの。この春彦が明日にもあれ、稀代の面をつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮るか。

かつら 云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや、殿上人や弓取とは一つになるまい。

春彦 殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら はて、くどい。知れたことぢやに……。

(桂は顔をそむけて取合はず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてゝ押隔てる。)

かへで あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては悪い。いさかひはもう止してくだされ。

春彦 その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してあれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の縁につながらて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。

かつら おゝ、姉と云はれずとも大事ごさらぬ。職人風情を妹婿に持つたとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ云ふか。

(春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちに、父の聲。)

夜叉王 えゝ、騒がしい。鎖まらぬか。

(これを聴きて春彦は控へる。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌を持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりには木の屑など取散したり。)

春彦 由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたけをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。

かへで これもわたしは姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりますな。

夜叉王 おゝ、なんで叱らう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝある事ぢや。珍らしいもあるまい。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。

二人 あい。

(桂と楓は起つて奥に入る。)

夜叉王 なる、春彦。妹とは違つて氣がさの姉ぢや。同じ屋根の下に起き臥しすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多からう

が、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆に奉公したもの、縁あつてこの夜叉王と女夫になり、あづまへ流れ下つたが、育ちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違うて、母は姉鼻肩、父は妹鼻肩。思ひ／＼に子ども鼻肩争ひから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。は／＼／＼。

春彦 さう承はれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならでは、夫に持たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は争はれぬものでござりまするな。

夜叉王 ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

(暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈臺を持ち出て出づ。)

春彦 おゝ、取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ詔へて置いた鑿と小刀をうけ取つて來ねばなるまいか。

かへで けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……。

春彦 いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早う取寄せて置かうぞ。

夜叉王 おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通ひなれた路、一晌ほどに戻つて來まする。

(春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つゝいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさ／＼けて出づ。)

僧 これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませ

ぬぞ。

(楓ははつと平伏す。頼家主従すゝみ入れば、夜叉王も出で迎へる。)

夜叉王 思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださります。

(頼家は縁に腰を掛けろ。)

夜叉王 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに残さんと、さきに其方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経るも出來せず、幾たびか延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎 多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後已に半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとは餘りの懈怠。もはや猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌さん／＼ぢやぞ。

頼家 子は生れつゝの性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、子が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王 御立腹おそれ入りました。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて已に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家 えゝ、催促の都度におなじことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎 この上は唯だ延引とのみでは相済むまい。いつの頃までには

かならず出来するか、あらかじめ期日をきだめてお託を申せ。

夜叉王 その期日は申上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠などとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなぎる精力が、兩の腕におのづから湊まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られます。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

僧 これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくりりと取止めのないことばかり申上げてゐたら、御癪癖がいよく募らうほどこに、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王 ちやと云うて、出来ぬものはなう。

僧 なんの、こなたの腕で出来ぬことがあらう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王 さあ、それゆゑに出来ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかにも無念ぢや。

頼家 なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうとも、

早急には出来ぬといふか。

夜叉王 恐れながら早急には……。

頼家 むゝ、おのれ覺悟せい。

(癪癖募りし頼家は、五郎のさゝげたる太刀を引つ取つて、あはや抜かんとす。奥より桂、走り出づ。)

かつら まあ、まあ、お待ちくださいませ。

頼家 えゝ、退け、のけ。

かつら 先づお鎮まりくださりませ。面は唯今献上いたします。なう、父様。

(夜叉王は黙して答へず。)

五郎 なに、面は已に出来してをるか。

頼家 えゝ、おのれ。前後不揃ひのことを申立てゝ、子をあざむかうでな。

かつら いえ、いえ、嘘いつはりではござりませぬ。面はたしかに出来して居ります。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出来したと云ふあの面を、いつそ献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出来した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがふが上分別ぢやぞ。

夜叉王 命が惜いか、名が惜いか。こなた衆の知つたことではない。黙つておゐやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御。その面を持つて来て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで あい、あい。

(かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて頼家の前にさゝぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。)

かつら いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

頼家 おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎 上様おん顔に生寫しぢや。

頼家 むゝ。(飽かず打成る。)

僧 さればこそ云はぬことか。それほどの物が出来してゐながら、兎かう澁つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝ

はゝゝ。

夜叉王 (形をあらためる) 何分にもわが心にかなはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方にはその面をなんと御覽なされます。

頼家 さすがは夜叉王、あつぱれの者ぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あつぱれとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んでをります。

五郎 面が死んでをるとは……。

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、

われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面ではござりまする。

五郎 そちは左様に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に根を宿し、何者をか呪ふがとき、怨霊怪異なんどのたぐひ……。

僧 あ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊、ありがたきお禮を申されい。

頼家 むゝ。兎にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。

夜叉王 強て御所望とござりますれば……。

頼家 おゝ、所望ぢや。それ。

(頼家は願にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、すこしく嬪を含みて頼家にさゝぐ。頼家は更にその顔をぢつと視る。)

頼家 いや、猶かされて主人に所望がある。この娘を予が手許に召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まか

せ、親の口から御返事は申上げられませぬ。

(桂は應せず、すゝみ出づ。)

かつら 父様。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家 うい奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらばこれよりその面をさゝげて、頼家の供してまわれ。かつら

かしこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつゝいて起つ。楓は姉の袂をひかへて、心許なげに囁く。)

かへで 姉さま。おまへは御奉公に……。

かつら おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢のやうな望みが今叶うた。

(かつらは誇りに見かへりて、庭に降り立つ。)

僧 やれ、やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王どの、あす又逢ひませうぞ。

(頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。)

頼家 おゝ、いつの間にか暗うなつた。

(僧はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はぢつと思案の體なり。)

かへで 父さま、お見送りを……。

(夜叉王は初めて心づきたる如く、娘と共に門口に送り出づ。)

五郎 そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

(頼家等は相前後して出でゆく。夜叉王は立ち上りて、しばらく黙然としてあたりしが、やがてつか／＼と縁にあり、細工場より櫓を持ち來りて、壁にかけたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓はおどろきて取廻る。)

かへで あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。

夜叉王 せつば詰りて是非におよばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。

かへで さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出来不出來は時の運。一生のうちに一度でも天晴れ名作が出来ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉王 む。

かへで 拙い細工を世に出したをそれほど無念と思召さば、これくらいよく精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

(かへでは繩りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を睨ちてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。)

(二)

おなじく桂川のほとり、虎溪橋の袂。川邊には御徒本たちて、世と塵とみだれ生ひたり。橋を隔てゝ修禪寺の山門みゆ。同じ日の宵。

(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。)

五郎 上様は桂どのと、川邊つたひにそゞろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、修禪寺の御座所もはや眼のまへぢや。この橋の袂にたゞずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧 いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ姫女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が付き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまなう。

(とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゞずむ。)

僧 殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。五郎 お風呂とて自づと沸いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……。先づお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合はぬ不粹をいふぞ。若き男女がむつまじう語らうてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝは。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

頼家 おゝ、月が出た。河原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋はまた一としほの風情ぢやなう。かつら 馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

(頼家はありあふ石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭りて立つ。月明かして蟲の聲きこゆ。)

頼家 鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、薨をならべて綺羅を競へど、それはうはへの榮えにて、うらははおそろしき罪の巷、惡魔の巣ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。(月を仰ぎて云ふ)

かつら 鎌倉山に時めいておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司にもお使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れませぬこの三月、窟詣での下向路、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家 おゝ、その時そちの名を聞へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

かつら まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかに、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりますと、お答へ申上げました。

れば、おまへ様はなんと仰せられました。

頼家 非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、
つい戯れに申したなう。

かつら お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、宿へ日参いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……。

頼家 武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほど嬉しいか。そちも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘若狭といへる側女ありしが、能員ほろびし其砌に、不憫や若狭も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狭と云へ。

かつら あ、わたくしが若狭の局と……。え、ありがたうござりまする。

頼家 あたゝかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。戀をうしなひし頼家は、こゝに新しき戀を得て、心の痛みもやうやく癒えた。今はもろゝの煩惱を斷つて、安らげくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月には雲の障りあり。その望みも果敢なく破れて、予に萬一のことあらば、そちの父に打たせたる彼のおもてを形見と思へ。叔父の蒲殿は罪無うして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなじ路を辿らうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、臍當、腹巻したる軍兵二人、上下よりうかゞひ出で、芒むらに潛む。蟲の聲俄にやむ。)

かつら あたりにすだく蟲の聲、消き吹すやうに止みましたは……。頼家 人やまゐりし。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、臍當にて出づ。)

行親 上、これに御座遊ばされましたか。
頼家 誰ぢや。

(桂は登籠をかざす。頼家透しみる。)

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 おゝ、兵衛か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親 北條殿のおん使に……。

頼家 なに、北條殿の使……。扱はこの頼家を討たうが爲な。

行親 これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして行親参上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家 云ふな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参人は、察するところ、北條の密意をうけて予を不意撃にする巧みであらうが……。

行親 天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨ほろび殲さず。且は函根より西の山路に、盜賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心として斯様にいかめしう扮装し申した。上に對したてまつりて、不意撃の狼藉なんど、いかで、いかで……。

頼家 たとひ如何やうに陳ずるとも、憎き北條の使なんどに對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。歸れ、かへれ。

(行親は臍がず。しづかに桂をみかへる。)

行親 これにある女性……。

頼家 子が召仕ひの女子ぢやよ。

行親 おん謹みの身を以て、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

(桂は堪へず、ナムみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら。お身は卜者か人相見か。初見参のわらはに對して、素性賤しき女子なんど、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。まして今は將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一應の會釋もせで無禮の雜言は、鎌倉武士といふにも似ぬ、さりとて作法をわきまへぬ

者なう。

(冷笑はれて行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家 おゝ、子が許した。

行親 北條どのにも謀らせたまはず……。

頼家 北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほど尊いか。時政も義時も予の家来ぢやぞ。

行親 さりとて、尼御臺もおはしますに……。

頼家 えゝ、くだい奴。おのれ等の云ふこと、聴くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親 さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退散、委細は明朝あらためて見参の上……。

頼家 いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狭、まゐれ。

(頼家は起ち上りて桂の手を取り、打連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。世のあひだに潜みし軍兵出づ。)

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もござりませぬば……。

兵二 手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親 北條殿の密旨を蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、流石は上様、早くもそれと覺られて、われに油斷を見せたまはねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人數一度にこみ入つて本意を遂げうぞ。

上様は早業の達人、近習の者共に手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狭し、夜いくさぢや。うろたへて同土撃すな。

兵 はつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控へたる者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

兵一 心得申した。

(一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかぶひ出づ。)

春彦 大仁の町から戻る路々に、物の具したる兵者が、こゝに五人かしこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、上様を失ひたてまつる結構な。さりとては大事ぢや。

(遠近にて寢鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡りて出づ。)

五郎 常はさびしき山里の、今宵は何とやら人物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下一をわたり見廻らうか。

春彦 五郎郎のではおはさぬか。

五郎 おゝ、春彦か。

(春彦は近きてさゝやく。)

五郎 や、なんと云ふ。金窪の参入は……。上様を……。しかと左様か。むゝ。

(五郎はあわたとしく引返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻をたづさへて出で、無言にて撃つてかゝる。五郎は抜きあはせて、忽ち斬つて捨つ。軍兵數人、上下より走り出で、五郎を押つ取りまく。)

五郎 やあ、春彦。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ参じて、この趣を注進せい。

春彦 はつ。

(春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。)

(三)

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

(向ふより楓は走り出づ。)